

研究の沿革

相田 満

《一》研究計画立案の経緯

本年度（平成十四年度）より三年間、文部科学省萌芽研究の助成を受け、
〈和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究〉という主題で研究を始める。

本研究の開始に先立つこと四年前、すなわち平成十年度から十二年度にかけて、本研究の構成員である相田満・入口敦志・山田直子により、〈和漢古典分類語彙の階層化に関する基礎的研究〉を、「文部省科学研究費補助金萌芽的研究」の助成を受けて取り組んだことがある。本研究は、その成果を継承しつつ、さらに特化させたものである。

相田・入口・山田の三人はいずれも所属所の国文学研究資料館で、大規模データベースのコンテンツ作りにたずさわるといふ、国文学という研究分野に携わる者にとっては希有な経験を共有する。

相田は『国文学年鑑』データの遡及データを累積させた「国文学論文目録データベース」のデータメンテナンスや、人物に関連する基礎情報を集成する「古典人名データベース」の構築に携わってきた。入口は毎年発刊される『国文学年鑑』の編集と「国文学論文目録データベース」の新規データの蓄積作業に、山田は『国書総目録』から発展した「古典籍総合目録データベース」の

構築にたずさわってきた。

うんざりするほどの論文タイトル、書名、人名など、およそ非人間的なまでに大量な情報群との格闘を要求され続けた経験は、一方で、これらの情報を統御する手法への関心が喚起されるに至り、三人の共通の興味へと育っていった。そして、情報リソースから独立して、ものごとを上位層で統御する「分類」という行為自体を研究する動機を深めることとなったのである。

本研究の「標題文芸」という構想は、そうした「分類」という行為について、三年間の協議と研究を重ねる中で醸成されたものである。すなわち、

事物を名称と概念間の関係で統御するべく生み出され続けてきた「標題」(Title/Label) 自体にも、「文芸」的現象が認められないだろうか

という素朴な疑問が、「標題文芸」という術語を案出し、本研究を構想するに至った。

「名は体を表す」というわけではないが、「標題文芸」というコンセプトからは、さまざまに興味深い事象やテーマが湧いてくる。

この研究主題に関心を持ってくれる人も次第に増えてきた。研究協議の場には、新たな顔ぶれが増えつつもある。人が増えるにしたがい、多様な視点が提示されるようになってきた。

《二》研究第一年度（平成十四年度）の研究組織に挙げた各名は、本年度に参画したメンバーのものである。ほかに日程・用務の都合で本年度

の会合には参会いただけなかった方もいる。

とりあえず、第一年度の記録と報告を兼ねて本冊子を作成したが、まだ研究が緒に就いたばかり故、ほとんど未開のテーマとも言える「標題文芸」の世界を渉猟するには、前途程遠き観もあろう。そのことは、参画者達一同、重々承知の上ではある。

それだからこそ、本冊子の読後に興味を持たれた方の積極的参加を歓迎したい。

《二》研究第一年度（平成十四年度）の研究組織

【研究代表者】

相田 満（国文学研究資料館・研究情報部・助手）

【研究分担者】

入口 敦志（国文学研究資料館・研究情報部・助手）

山田 直子（国文学研究資料館・整理閲覧部・助手）

安保 博史（群馬県立女子大学・文学部・助教授）

長崎 健（中央大学・文学部・教授）

渡辺 信和（同朋学園・仏教文化研究所・研究室長）

【研究協力者】

江戸 英雄（国文学研究資料館・研究情報部・助手）

《三》研究課題

【研究課題名】和漢古典籍における「標題文芸」の基礎的研究

The Fundamental Research about "The literature act of a title" which is visible to the Classic Books of Japan and China

【研究種目】萌芽研究

【研究領域】文学（国文学）〔領域番号二四二〕

【研究機関】二〇〇二年度（平成一四年度）～二〇〇四年度（平成一六年度）

【課題番号】一四六五一〇七八

【二〇〇二年度研究費】一三〇万円

《四》研究目的

〔一〕本研究の研究目的 平成十四年度 萌芽研究
研究計画圖書（新規）より

（一）萌芽研究で申請する理由

本研究は、「作品表題」(Title)や「目次標題」(contents)などの、およそ知的成果物に不可欠な「標題」の意匠について、和漢古典籍を対象に、分析・分類作業を試みるものである。

分析対象を古典籍に限定する理由は、「標題」の意匠に関する評価言説が多数取材可能なこと、「標題」自体が独立した作品も通行していたことなど、文化的継承性・表現技術・評価言説の諸点で、現代の作品以上に多様な典型的事例が期待されるからである。

そもそも「標題」には、作品世界の論理が凝縮されるだけでなく、その枠に収まり切れぬ言語遊戯的興趣も確認される。とりわけ、「目次標題」には、日本独自の文芸形態である連句・連歌にも通底する連纂の技法もうかがえ、流派・門閥とは全く無縁で自由な表現世界ではありながら、きわめて濃厚な文化的継承性が現れている。

しかし、このように特異な文芸現象に着目する先行研究が皆無なのは、従来の「近代的」価値観の枠組みに囚われすぎ、多様な資料群を横断的・マクロ的に捕らえる視点の欠如によるものではあるまいか。

そこで、上述の観点による分析を試み、「標題」に潜む「文芸」性の定立を求めたい。

(二) 研究の背景（着想に至った経緯等）

申請代表者は、二十年来『蒙求』の体裁に倣った標題揭示型類書の収集と分析に取り組んで来た。（『蒙求』型人物故事類書の書承に見る日本文学への影響に関する研究」「H7奨励研究(A)、代表：相田満」他）。さらに数年来、申請者を中心に和漢古典の知識型類聚編纂物の分類概念項目語彙（概念木・オントロジ）の収集と分析作業を行ってきた（『和漢古典分類語彙の階層化に関する基礎的研究』^{H10}萌芽的研究、代表：相田満）。

これらの研究を発展的に継続させる中で、「作品標題」における一字・一句の語義と継承性、「目次標題」引用・パロディ、定型句化、押韻などの言語遊戯が、かかる「標題」に散りばめられた作品が顕著に認められ、配列の妙と相俟って、かかる行為に対する賞賛的言辭や批評的言説も産み出されてもいることから、「標題文芸」なるコンセプトの基に体系化を試みる必要を痛感するに至り、ここに新たなプロジェクトを企画した次第である。

(三) 研究目的

本研究では、「作品標題」と「目次・評語標題」の分析の二系統で分析作業を進めたい。

まず、「作品標題」の分析作業では、国書総目録や中国典籍国書の古典籍に関する書名の電子化データを使用して、書名に使用される文字・語句の頻度分析結果を抽出。これを基礎として、継承関係の大綱と、詳細な文法的影響関係を求める。

次に「目次標題」については、典型的事例の抽出と分析作業により、その意匠の分類と、評価言説の分類を中心に進める。なお、これらの中には詩歌の文芸創作行為と密接に関わるものも少なくないことから、かかる文芸作品から標題が抽出・配列されるに至る一連の文芸行為の過程をモデル化して示すことにも取り組みたい。

(四) 当該分野におけるこの研究（計画）の学術的な特色・独創的な点及び予想される結果と意義

「標題文芸」という観点から、その配列規則と字義の継承性を総括的・系統的に分析する試みには、未だ先例がない。そこで、本研究で開発される研究手法と、基礎データは、広く公開に供することを予定している。このことにより、文学はもとより図書館情報学、認知科学、知識工学など、さまざまな面で有益な成果が提供できると予想する。なかでも、情報処理と文学教育との融合的教育プログラムの観点においては、格好の演習教材となろう。

(五) 国内外の関連する研究の中での当該研究の位置づけ

書名そのものの継承性に関する研究で体系的なものは存在せず、作品内における連纂手法に着目する研究は、俳諧・連歌を除けば、『古今和歌集』や『今昔物語集』に関する研究を嚆矢とする和歌・説話文学研究に見受けられる程度である。また、「目次標題」を独立させた作品については、従来教訓の一環として扱われ、内容に踏み込んだ論究はなかった。

しかし、これらの研究も、本研究で予定されるごとく、言語文化の総体の枠組みの中で、系統的に位置づけられるべきであろう。本研究は、その意味でも、活発な議論の土台となることが期待される。

【二】平成十四年度の研究目的

平成十四年度科学研究費補助金
(萌芽的研究) 交付申請書より

本研究は、人間が長い歴史をかけて生み出し続けてきた知的・文化的活動の生成物に必ずしもいってもよいほど存在する「標題」に、「文芸性」の意義付けと確立を求めることを目的とする。そこで、本研究では、「標題」の意匠を「作品表題」(Title)と「目次標題」(contents)とに大別して、分類・分析作業を試みたい。

分析対象は、基本的に和漢古典籍を中心とする。これは、「標題」の意匠に関する評価言説が多数取材可能なこと、「標題」自体が独立した作品も通行していたことなど、文化的継承性・表現技術・評価言説の諸点で、現代の作品以上に多様な典型的事例が期待されるからである。

ただし、研究の進展を期するためにも、現代的視点と素材、および国際比較的な観点も考察の対象したい。

《五》平成十四年度開催の共同研究会記録

◎第一回

【開催日】平成十四年五月二十七日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・入口・山田

【協議事項】

- ① 研究の進め方について(協議)
- ② 古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(協議)
- ③ 媒体と標題の文字数について(協議)

◎第二回

【開催日】平成十四年六月十七日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・入口・山田

【協議事項】

- ① 古典戯曲標題の奇数尊崇態度について(報告「入口」)
- ② 教育教材の開発について(協議)
- ③ 『類聚国史』の編纂意識について(報告「相田」)
- ④ 「随筆」という標題・ジャンルのターミノロジについて(協議)
- ⑤ 「注釈」のオントロジについて(協議)

◎第三回

【開催日】平成十四年七月十五日(月)

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・入口・山田

【協議事項】

- ① 脚本・浄瑠璃・浮世草子の標題字数調査（報告「入口」）
- ② 教育教材の開発…学生の夏休み課題に標題文芸についての調査・分析を課したこと（報告「相田」）
- ③ ジャンルと文体との関係について（協議）

◎第四回

【開催日】平成十四年八月二十六日（月）

【場所】国文学研究資料館相田研究室

【参加者】相田・江戸・山田

【協議事項】

- ① 和漢古典学のオントロジ（報告「相田」）
- ② 現在通行の古典注釈書の見出しの淵源について（協議）

◎第五回

【開催日】平成十四年九月二十七日（金）～二十九日（日）

【場所】福岡県久留米市および太宰府天満宮

【参加者】相田・安保・長崎

【協議事項】

- ① 研究の大綱と計画の進め方について（協議）
- ② 俳諧の書名意識について（協議）
- ③ 歌集の書名意識について（協議）

◎第六回

【開催日】平成十四年十月七日（月）

【場所】国文学研究資料館中会議室

【参加者】相田・安保・入口・江戸・山田・渡辺

【協議事項】

- ① 研究の大綱・計画の進め方・問題提議（協議）
- ② 脚本・浄瑠璃・浮世草子の標題の奇数時尊崇態度（報告「入口」）
- ③ 俳書における「標題」の意匠について（報告「安保」）

◎第七回

【開催日】平成十四年十二月八日（日）～九日（月）

【場所】すわ湖苑（長野県諏訪市）

【参加者】相田・入口・安保・江戸・長崎・渡辺

【協議事項】

- ① 中間報告書の作成について（協議）
- ② 現代における「標題」（報告「相田」）
- ③ 御伽草子の標題について（報告「渡辺」）

題名の文字数

入口 敦志

《一》題名の表記

まず次に掲げる『懷子』の各冊の題名を見ていただきたい。説明のための例は何でもよかったのだが、とりあえず表記の多様なものを用いることで例として出してみた。

○『懷子』の例

【冊】	【外題】	【内題】	【柱題】
第一冊目	ふところ子第一	懷子	――
第二冊目	懷子第二（楷書）	懷子	――
第三冊目	懷子第三（行書）	懷子	――
第四冊目	不斗古路子第四	懷子	――
第五冊目	懷子第五（楷書）	懷子	――
第六冊目	懷子第六（行書）	懷子	――
第七冊目	懷子第七（楷書）	懷子	――
第八冊目	ふところ子第八対句	懷子	――
第九冊目	懷子伽第九上（行書）	懷子伽	――
第十冊目	懷子伽第九下（楷書）	――	――
第十一冊目	懷子伽第十上（行書）	懷子伽	――

【冊】	【外題】	【内題】	【柱題】
第十二冊目	懷子伽第十下（行書）	――	――
第十三冊目	懷子傳第十一（行書）	懷子傳女	傳女
第十四冊目	懷子乳母第十二（行書）	乳母	めのと
第十五冊目	懷子乳母第十三（楷書）	乳母	めのと
第十六冊目	懷子乳母第十四（行書）	乳母	めのと
第十七冊目	懷子乳母第十五（行書）	乳母	めのと
第十八冊目	懷子乳母第十六（行書）	――	めのと
第十九冊目	懷子乳母第十七（楷書）	乳母	めのと
第二十冊目	懷子乳母第十八（行書）	乳母	めのと

（『近世文学資料類從 古俳諧編』による）

▽懷子 ふところこ 十八巻二十冊。俳諧。重頼編。（略）序文の成立は明暦二年（一六五六）六月、句集は万治三年（一六六〇）五月、詞寄は同年十月となる。万治三年刊。【内容】序文は徹底した『古今集』仮名序のもじり、巻数も同集に準じて二十冊。自足子の後序は真名序にならずらえて依頼されたもので、下記的位置にあるのは初印本による。

（『日本古典文学大辞典』項目担当…島本昌一）

これで見ると、『懷子』では内題は正式の名称を、外題はデザインとして